第6分科会

体験・実践型学習における
フィールドワークを通じた効果と運営上の課題

報告者

木原　麻子　京都産業大学　現代社会学部　准教授

豊田　祐輔　立命館大学　政策科学部　准教授

コーディネーター兼報告者

葉山　勉　京都精華大学　デザイン学部建築学科　教授

コーディネーター

道和　孝治郎　京都学園大学　経済経営学部経済学科　准教授

【参加者　63名】

近年、学生を地域社会等に連れ出して教育を行う体系である「体験・実践型学習」を行う大学が増えてきている。このような学習は、学生にとって社会での課題を身近に知ることに繋がり、その解決策を考えるのに役立つと言われている。

そこで、本分科会では、「体験・実践型学習」によって成果をあげられている大学の事例を紹介して頂き、学生の理解度や意識が変わるにはどのように進めていけばいいかを参加者の方とともに検討する。

第6分科会

体験・実践型学習における
フィールドワークを通じた効果と運営上の課題

京都学園大学　経済経営学部経済学科　准教授　道和　孝治郎

総括報告

1．進行表

10：00～10：10　開会挨拶・趣旨説明：葉山勉氏（京都精華大学）
10：10～11：00　第一発表：木原麻子氏（京都産業大学）
11：00～11：50　第二発表：豊田祐輔氏（立命館大学）
11：50～12：00　コメントシート記入
12：00～13：30　昼休み
13：30～14：10　第三発表：葉山勉氏（京都精華大学）
14：10～14：30　コメントシートに対するリプライ：質問・コメント票に対する登壇者からの回答・補足説明
14：30～15：00　グループディスカッション
15：00～15：20　グループディスカッションの報告（とそれに対する登壇者からの回答・説明）
15：20～15：30　総括：道和孝治郎氏（京都学園大学）

2．概要

2-1．分科会のねらい

本分科会では「体験・実践型学習におけるフィールドワークを通じた効果と運営上の課題」をテーマに、「体験・実践型学習」の教育的効果と課題を考えた。様々な分野における「体験・実践型学習」の効果と課題を参加者の皆様と共有したいため、登壇者は国内での活動に重点をおく教員二名（うち理科系担当者一名）と国外での活動に重点をおく教員一名に依頼し、多角的な議論を目指した。また、登壇者の報告だけでなく参加者同士で直接議論する機会（グループディスカッション）を設け、分科会参加者全体で教育的効果や課題が発見・確認されることを目指した。

2-2．各プログラムの概要

①開会挨拶・趣旨説明（葉山勉氏）

まず、ダブルコーディネーターの一人である葉山勉氏が予稿集の本分科会頁扉に記された梗概を読み上げた後、「体験・実践型学習」はメリットがある一方、課題も多くあることを指摘した。具体的にはメリットとして、⑴実体験としての知識の習得・現実問題の理解、⑵社会でのコミュニケーションスキルの習得、⑶自己スケジュール管理と自己責任の理解、⑷グループワーク活動の経験、⑸クリエイティブな思考力と問題解決能力の習得の５つが挙げられる一方、⑴厳正な成績評価、⑵参加学生のモチベーション維持と学生満足度、⑶知的財産権と業務報酬、⑷学内外との実施協力体制の構築と継続性、⑸外部評価体制の構築と業界との関係の点で課題も挙げられることを指摘した。その上で、上記課題の解決方法を探るきっかけを見つけることと上記課題以外にどのような課題があるかを知ることも目的とすることを説明した。

②第一報告　「課題解決型授業における運営上の課題と学外者との交流に関する検討」　木原麻子氏

木原氏は京都産業大学現代社会学部所属の准教授で、現在、共通教育科目として課題解決型授業（PBL）を担当している。まず科目の開講形式やプログラム内容について紹介がなされ、次に過去に担当した取り組み事例の紹介がなされた。さらに、授業運営上の課題を受講者に関するもの、

教員の関わり方に関するもの、課題提供者等の学外協力者に関するものについて報告された後、課題解決型授業において教員にできることは何かについて以下の３つの視点から報告がなされた。⑴授業開始前における綿密な課題設定（受講生の行動を引き出すものであるかどうか、授業期間内に取り組めるボリュームであるかどうか）、⑵教員は受講生にどこまで関わるかを調整できる（受講生は自分で学ぶ能力を持っており、また、教員も答えを知らないという認識を持つことがポイント）、⑶課題提供者を始めとした協力者との良好なコミュニケーション（課題の内容やスケジュール感の共有、受講生の動きに関する情報共有等）などである。課題解決型授業ではとかく教員が受講生にどのように関わるかが注目されがちであるが、実は課題設定や協力者との種々の調整といった見えない部分に活動の成否が大きく関わっているのではないかとの見解が示された。

最後に課題解決型授業における学外者との交流に関する検討について報告がなされた。木原氏は、学外者との交流を通じた受講生のコミュニケーションに対する自己評価が１回のPBL経験では一旦下がることに着目し、２回目の経験をカリキュラムでも用意する必要となる可能性があることを示唆した。

③第二報告　「立命館大学政策科学部におけるPBL：タイ・プロジェクト」　豊田祐輔氏

豊田氏は立命館大学政策科学部所属の准教授で木原氏と同じくPBLを担当している。ただ、海外に展開するPBL、中でもタイでの活動を担当する教員である。まず、豊田氏からタイ・プロジェクトの説明がなされ、次にタイ・プロジェクトの進め方の説明がなされた。その上でタイ・プロジェクトの主な課題が報告された。タイ・プロジェクトはタイにおける都市と住宅環境開発へ向けた政策形成をテーマとして留学生を含む学生がグループワークで政策提案につながるような課題解決を探るものである。現地実習に行くまで（前期）の課題として、⑴日本人学生は留学生と語学力に差があり留学生中心の議論になりがちであること、⑵テーマ決めがバラバラで、最終的に誰かが諦めて一つになってしまう傾向が多々あることの２点が主に説明された。成績評価方法の観点からは、期末レポート（プロジェクト報告書）が成績の大きな比重を占めていて、報告書には誰がどこを担当したのかを明記させ個別に評価しているが、あまり頑張っていない学生が頑張っているようになっていたりする点が主に課題として説明された。タイ・プロジェクトの進み方・実態の観点からは、⑴前期は上記で記した通り学生間で英語の壁がありグループワークが機能しづらいこと、⑵ 授業内で終了できなかった学生グループの打ち合わせをする場合に、学業に専念している留学生に比べてアルバイトなどの予定が確定している日本人学生が参加しづらいこと、⑶日本での文献調査と現地実習に行った際の中身に乖離があり、情報が最新ではないこと、⑷統計学を駆使した基礎力はあるがデータ収集等の応用力は乏しいこと等の４点が主に課題として説明された。課題はあるもののこのプロジェクトを通じて、社会人基礎力や英語能力（スピーキング力やリスニング力）、そして現地訪問することで固定観念を打破し新しい発見ができる点に教育的効果があることもあわせて説明された。

④コメントシートへの記入

午前中の残り時間を使用して、参加者に木原氏と豊田氏への質問をコメント用紙の方に記入して頂いた。

⑤第三報告　「デザイン活動としての学生教育」　葉山勉氏

葉山氏は京都精華大学デザイン学部の教授で建築・デザイン設計といった視点から学部授業と大学院授業の両方で「体験・実践型学習」を行っている。報告は今まで実施してきた10近くに及ぶプロジェクトの内容を説明し、各プロジェクト固有の課題を紹介する形でなされた。報告されたプロジェクトの一部は以下の通りである。

⑴幼稚園からの依頼による遊具（積み木ブロック、シーソー等）の制作。

課題：楽しいこと、頑丈で倒れないこと、舐めても大丈夫なこと、角がないこと、柔らかいこと等の幼稚園特有の制約された状況下での作品制作（参加学生のモチベーション維持と学生満足度の点での課題）。

⑵上賀茂神社で京都らしいオリジナル水車を制作し発電・充電後にライトアップする。

課題：作成したものがイベント後ゴミになってしまう（参加学生のモチベーション維持と学生満足度の点での課題）。

⑶企業からの依頼で空気乾燥器のデザインを作成。

課題：商品化されたが大学名や学生名をだすことが許可されなかった（知的財産権と業務報酬の点での課題）。

⑷漁業協同組合から請け負った建築設計。

課題：学生が案を考えて設計したものが竣工して建ったものであるが、地元の設計事務所の仕事を奪うことになったかもしれない。また、大学が業務委託を請けた場合に一般相場よりも安くなる（業務報酬と業界との関係の点での課題）。

⑸中央卸売市場（京都）の活性化（キャラクター作り、グッズ作り、コマーシャルソング作り、地図作り等）。

課題：必修科目かつ交通費自己負担で行ったため、一部の学生から不満が噴出した（参加学生のモチベーション維持と学生満足度の点での課題）。

⑹精華町と共同で茶室を提案する。

課題：図面を作って制作自体は業者に依頼する予定であったが、急きょ諸事情により業者から断られ、学生がボランティアで作成した（参加学生のモチベーション維持と学生満足度、業務報酬の点での課題）。

上記のような活動を行うと同時に新聞各社に取材の依頼や葉山氏自身がラジオに出演することで、学生のモチベーション向上を意識して取り組んできたことが説明された。ただ、趣旨説明でも説明されたように、「体験・実践型学習」を行う上で解決されていない課題も残されているため慎重に実施することが必要であることも説明された。

⑥コメントシートに対するリプライ

午前の部で寄せられた質問を分類し、コーディネーター（道和）の司会の下で質問に対する回答を行った。

問１：プロジェクトの経費負担等についてどうなっているのか？（交通費・プロジェクトに対する収入）

木原氏の回答：交通費は出ない。プロジェクトに対する収入もない。

豊田氏の回答：交通費・滞在費・保険費は基本的に学生負担である。

問２：課題提供者の見つけ方はどうなっているのか？課題提供者の継続・変更のタイミングはどうなっているのか？課題提供者のメリットはどうなっているのか？

木原氏の回答：課題提供者は教員自らのネットワークで依頼して見つけているかキャリア教育研究センターがインターンシップでお世話になっている企業にお願いして見つけている。継続かどうかは特に決まっていない。メリットに関しては、課題提供者の若手社員が担当者に就き学生に指導することでメリットを感じておられる場合がある。

問３：履修方法に関して。O/OCF-PBLは選択授業であるのか？O/OCF-PBL１は先修条件であるのか？学生が希望のプロジェクトを選べるのか？

木原氏の回答：必修ではなく選択授業である。O/OCF-PBL１は先修条件である。O/OCF-PBL１を取らないとO/OCF-PBL２、O/OCF-PBL３に進めない。エントリーシートに第一希望から第六希望まで書いてもらって、学生が集中しないプロジェクトの場合は第一希望になることが多いが、集中するプロジェクトの場合は第二希望に回る場合もある。

問４：ドロップアウトやフリーライダーになった学生のケアはどうなっているのか？

豊田氏の回答：ドロップアウトはF評価、フリーライダーはTeaching Assistant（TA）などに情報を聞いて真面目に取り組んでいなければ真面目に取り組んでいる学生と成績を区別するようにしている。

（番外編）

葉山氏の回答：成績評価に関しては悪い点数を与える。フリーライダーは真面目に頑張った学生への不満につながることになるのでペナルティーを与えている。

問５：クラスが成立するかどうか？成立する場合人数的な基準はどうなっているのか？プロジェクトの成果をどうみているのか？

木原氏の回答：人数的な基準を明確に決めていないが、３人いないとチームにならないので、受講者が最低でも３人

いるかどうかで判断している。プロジェクトの成果をどうみるかについては、各クラスが成果報告会で報告し、その報告を聞いて課題提供企業による採点、会場のメンバーによる採点、教員で構成する評価委員による採点の全体で点数を出している。報告会後、各教室で学生たちに課題提供企業から詳しいコメントのフィードバックをして頂いている。

豊田氏の回答：１人の学生に対して２人の教員をつけることができないので、６人以上の場合にクラスが原則成立するようにしている。５人以下の場合は、基本的に他のプロジェクトに回って頂くことにしている。

問６：客観的評価の方法に関して。

木原氏の回答：参加度合いに関しては学生が提出する「PBL活動記録シート」の枚数で判断している（50%）。最終面談評価に関しては別のクラスの教員から他者評価を受ける形で判断している（20%）。最終報告の結果に関しては課題提供企業からの評価、会場の評価、教員で構成される評価委員の評価から割り出して判断している（20%）。学生たちが自分たち自身の活動内容をまとめた活動報告書でも判断している（10%）。

豊田氏の回答：レポートと発表に関しては基本的に問題発見の明確さと問題から解決に至る論理性で決めている。グループワークや取り組みに関しては自分自身とTAやEducation Supporter（ES）による「学生たちがどれだけ真剣に行動しているかどうか」という判断と出席で決めている。

問７：リスク管理に関して（保険や誓約書）。

木原氏の回答：受講生全員に大学の方から活動保険等がかかる仕組みになっている。

豊田氏の回答：保険は自己負担で全員にかけてもらう。留学生は夏休みに母国に帰っている場合がある。その場合、基本的に母国でかけてもらいメールでその証拠を送ってもらうようにしている。誓約書は学生には教員の指導に従うようにという誓約をかけている。保証人に対しても手紙を送ってサインを頂いている。

問８：事前指導に関して。海外の場合、どこまで到達させるのか？フィールドワークの前に何かするのか？

豊田氏の回答：基本的に研究目的と仮説まで考えさせるようにしている。具体的にはどんな調査をして何を明らかにしたいかまで考えさせて現地調査に行く。その際、論理性に問題がある場合は基本的に指摘するようにしている。

⑦グループディスカッションとその報告

グループディスカッションは６名で構成されるチームを８つ作り、以下の論題に基づいて議論してもらうことにした。

論題：「課題解決型授業などの「体験・実践型学習」を設けても、実施しない場合に比べると教育的効果はあるが、課題は当然生じる。具体的には、学生の主体性等のアクション面、課題発見力等のシンキング面、規律性などのチームワーク面のそれぞれで何かと課題が生じる。課題を克服するためにどのような取り組みが必要かをそれぞれグループで議論してください。また、グループ内で「体験・実践型学習」を行っている先生方がおられればその現状を報告しあって、課題を解決するためにどういったことをしているか情報交換してください。」

各チームで議論された主な課題等を列挙すると以下の通りである。

⑴教員の関与に関して：関与しなさすぎてもしすぎても完成度が低くなる、⑵評価方法によっては一夜漬けでやったグループの方が良い評価の場合もありうる、⑶通い型と宿泊型の２種類の「体験・実践型学習」の課題：通い型の方が学びの深さが浅くなる、⑷海外引率に関して：病気の場合どう対応するのか？⑸評価に関して：他者評価を取り入れると評価が甘くなる傾向にある、⑹学生のモチベーションをどう持続的に高く保たせるのか？⑺学生の報告会でゴールをどこに設定するのか？つまり、地域のニーズに応えているのか？と聞かれても、そもそも地域のニーズは短期間で分かるものではない、⑻様々な基本知識が低いという問題があるので、教員がどこまで指示するのか、具体的なタスクまで指示するのかが課題である、⑼学生の成長が一番といいながら「体験・実践型学習」という企画そのものの成功を優先してしまうことがある、⑽私の体験から言うと、絵画のプロジェクトで壁画を描くもので稚拙な絵があった場合、モチベーションが低下するためどうするかが課題である。そこで、

失敗しても良いというようにしている、⑾プログラムの持続性が教員に依存している、⑿ニュータウンの活性化プロジェクト：交通費が課題である。解決策として自治体のサポートや父母会からの支援があれば良いなと感じる、⒀評価の客観性をどう担保するか？

３．総括

本分科会では、登壇者の報告から「体験･実践型学習」の教育的効果と課題が分科会全体で共有されたことに加え、グループディスカッションを通じて新たな課題も発見されたと考える。まず、３人の登壇者の報告はバラエティーに富んだ内容であったため様々な教育的効果と課題が共有できた。次に、グループディスカッションで登壇者の報告で指摘された課題以外の課題も議論されたため、新たな課題が発見された。

こうした新たな課題の発見は、「体験・実践型学習」の取り組みを行う大学が増えてきている現状を考えると、この学習体系が学生に対して社会での課題を身近に知ることに繋がりその解決策を考えるのに役立つものであるとはいえ、教員が授業運営するうえでいかに難しい問題を抱えた授業体系かが分かる。しかし、趣旨説明で葉山氏が指摘したメリットが間違いなく存在するため、現時点で実施しておらず実施不可欠であると考える教員には是非実施して頂きたい授業体系として提案する。

最後に、ご協力下さった登壇者と参加者に心より感謝申し上げる。また、司会者（道和）の不手際からグループディスカッション等の時間が十分確保できず、皆様にはご迷惑をおかけした。ここに心よりお詫び申し上げる。

第６分科会コーディネーター　道和　孝治郎（京都学園大学）

課題解決型授業における運営上の課題と学外者との交流に関する検討
～京都産業大学の課題解決型授業（PBL）の取組みを事例に～

京都産業大学　現代社会学部　准教授　木原　麻子

第23回　FDフォーラム　第6分科会　2018.3.4

体験・実践型学習におけるフィールドワークを通じた効果と運営上の課題

課題解決型授業における
運営上の課題と
学外者との交流に関する検討

～京都産業大学の課題解決型授業（PBL）の
取組みを事例に～

木原麻子（京都産業大学）

（画像）https://www.kyoto-su.ac.jp/

1

本日の概要

1．授業の紹介　「O/OCF-PBL」

2．取組み事例

3．授業運営上の課題

4．課題解決型授業における学外者との交流に関する検討

2

1．授業の紹介　「O/OCF-PBL」

3

授業の概要

- 名称：O/OCF-PBL（オーシフ・ピービーエル）
- 2008年開講
- 共通教育科目（学部横断　複数クラス同時開講）
- 目的：汎用的課題解決能力の育成（≠専門科目）
- 手法：学外団体（企業、自治体、NPOなど）との連携により、幅広く社会にある現在進行形の課題をチームで解決する
- 特徴：3年間の段階的教育

4

３年間の段階的教育（１年次～３年次）

O/OCF-PBL1
1年次秋学期
2単位
チーム活動の基礎を修得
・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝﾜｰｸ
・ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ
・課題解決の体験

2017：345名・16ｸﾗｽ

O/OCF-PBL2
2年次春～秋
4単位
企業・団体から提供された課題に10~15名のチームで取り組む
比較的具体性のある課題

2017：128名・8ｸﾗｽ

O/OCF-PBL3
3年次春～秋
4単位
企業・団体から提供された課題に10~15名のチームで取り組む
比較的抽象的な課題

2017：不開講

基本的に学内での学習　　**学内と学外を往復しながらの学習**

5

PBL１のプログラム（日程は2016年度）

	授業日		内容	
第1週 第2週	9/9	金	PBL2・3ｆ最終成果報告会」に参加	「個」から「グループ」へ
第3週	9/22 9/26	木 月	1. オリエンテーション 2. PCエゴグラム(事前検査)・意識調査実施 3. OKグラム（事前検査）の実施 4. 自己成長トレーニングシートの解説	
第4週	9/29 10/3	木 月	クラス・オリエンテーションとプラスのストローク 1. クラス・オリエンテーション 2. プラスのストロークについて 3. プラスのストロークを使って自己紹介	
第5週	10/6 10/17	木 月	アクティブ・リスニング 1. PCエゴグラム返却 2. 自己成長トレーニングシートの記入（今後毎回） 3. 上手な話の聞き方 4. グループで聞き方の違いを体感 5. 自己成長トレーニングシートの記入（今後毎回）	
第6週	10/13 10/24	木 月	アサーション 1. 2分間トーク 2. アサーションとは 3. アサーティブに表現するワーク	
第7週	10/20 10/31	木 月	「個」から「グループ」へのまとめ 1. 2分間トーク 2. プラスのストローク、アクティブ・リスニング、アサーションを実践するワーク	
第8週	10/27 11/8	木 火	チームビルディング（1） 1. 2分間トーク 2. チームワークへの入口「レゴ伝言ワーク」	「グループ」から「チーム」へ
第9週	11/10 11/14	木 月	チームビルディング（2） 1. 2分間トーク 2. 合意形成の方法を学ぶ「月で遭難」	

	授業日		内容	
第10週	11/17 11/21	木 月	チームビルディング（3） 1. 2分間トーク 2. ディスカッションの基礎「ブレストとKJ法」	「チーム」で活動する
第11週	11/24 11/28	木 月	チームで課題解決（1） 1. 課題①発表 2. チーム作り、議事録・企画書について 3. チームミーティング	
第12週	12/1 12/5	木 月	チームで課題解決（2） 1. 課題①に対する報告会 2. 課題②発表 3. チーム作り、チームミーティング	
第13週	12/8 12/12	木 月	チームで課題解決（3） 1. チームミーティング、進捗状況発表など	
第14週	12/15 12/19	木 月	チームで課題解決（4） 1. チームミーティング、進捗状況発表など	
第15週	12/22 12/26	木 月	チームで課題解決（5） 1. 課題②に対する最終報告会 2. 振り返り	
第16週	1/12 1/16	木 月	まとめ（1） 1. チーム活動の振り返りレポート 2. PCエゴグラム(事後検査)・意識調査実施 3. OKグラム（事後検査）の実施	活動の振り返りとまとめ
第17週	1/19 1/23	木 月	まとめ（2） 1. PCエゴグラム返却 2. 全体振り返りシート記入 3. 最終授業アンケート記入 4. PBL2について解説、質疑応答	

6

PBL２と３の大まかなスケジュール

時期		PBL2	PBL3
4月	上旬	課題（目標）提示／チーム形成	問題（目的）提示／チーム形成
	中旬		
	下旬	課題の本質を知り解決策を立案するための調査・分析	課題（目標）の発見
5月	上旬		課題の本質を知り解決策を立案するための調査・分析
	中旬		
	下旬	解決策の立案	解決策の立案
6月	上旬	中間報告会	中間報告会
	中旬	解決策の改善	解決策の改善
	下旬		
7月	上旬		
	中旬	解決策の実践	解決策の実践
	下旬	（定期試験）	（定期試験）
8月	上旬		
	中旬	解決策の実践	解決策の実践
	下旬	最終報告会の準備	最終報告会の準備
9月	上旬		
	中旬	最終報告会	最終報告会
	下旬	振り返り／活動報告書作成	振り返り／活動報告書作成

7

過去に担当したプロジェクトテーマ

	課題提供者	課題	受講生
2008	㈱ルネサンス【ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ】	20代の会員も楽しく継続できるスポーツクラブの提案	3年11名
2009	㈱一保堂茶舗【茶販売】	大学生対象の日本茶の魅力体感型イベントの企画提案	2年2名 3年5名 計7名
2010	大日本印刷㈱【印刷・情報】	ITを活用した外国人向け観光情報サービスの検討	2年13名 3年1名 計14名
2011	大日本印刷㈱【印刷・情報】	ITを活用した外国人向け観光サービスの検討2.0	2年10名 3年2名 計12名
2012	大日本印刷㈱【印刷・情報】	「タダで楽しめる京都♪」を探せ！学生視点で京都の魅力を再発見し、コンテンツを制作せよ	2年13名 3年1名 計14名

8

つづき

	課題提供者	課題	受講生
2013	㈱union.a【編集・企画・制作】	京都市バス・地下鉄の路線を使って市バスや地下鉄の利用が促進されるゲームイベントを考案し、実行してください。	2年14名
2014	㈱union.a【編集・企画・制作】	ヒラギノ得皆（トクミナ）プロジェクト！上賀茂「柊野地区」の魅力を発掘しながら京都市バス新路線の利用を促進する地域一体型企画	2年12名
2015	京都移住計画【移住サポート】	京都への移住促進の企画を実施せよ！	3年12名
2016	京都移住計画【移住サポート】	地元や地域資源に着目し、商い経験を通じた地域での新しい生き方を模索せよ	3年6名
2017	京都移住計画【移住サポート】	京都市北部に位置する花背地域の活性化プロジェクトを実行せよ	2年20名

9

２．取り組み事例

10

事例　　クラスとプロジェクトの概要

- 受講生：20名（男11名　女9名）
  経済３ 経営11 法2 外1 文化3
- 課題

「京都市北部に位置する花背地域の活性化プロジェクトを実行せよ」そのために

(1)花背への移住を検討する人のための「花背ガイド」を作成せよ

(2)地域の空き家の改修を手伝いながら交流拠点として整備し、交流イベントを実施せよ

- 課題提供者　「京都移住計画」

12

第６分科会

活動内容と結果

(1)地域を歩き、住民にインタビューをしながら、地域の自然や四季、暮らしの様子、地図などをまとめ、200部印刷し、地域や移住検討者に配布した。

(2)移住者との交流拠点として整備計画があった地域の空き家改修工事を手伝い、そこで移住検討者向けのイベントを開催するという計画のうち、改修まではできたが、8月に予定していたイベントは準備が間に合わず延期し、10月に地域の方が開催するイベントに協力するという形で実行した

13

３．授業運営上の課題

14

受講生編

- 最初はがんばるがやがてモチベーションが落ちる
- メンバー間のモチベーションの格差
- チームメンバー間の諍い（恋愛絡むことも）
- 受講途中で消息不明に
- 時間切れ→納得のいかない結果

15

教員の関わり編

- 学生と一緒に活動にハマってしまう→過労
- 手放し運転（放任）
- どこまで自主性に任せるのか
- 残り授業期間から逆算すると課題達成までたどり着かないとき

16

協力者編

- 課題提供者と十分なコミュニケーションが取れない
- 課題提供者が甘い（必要な時に厳しくできない）
- 地域住民との関係
- 学生を紹介することのリスク（信頼関係）

17

課題設定編

- 課題の抽象性（行動に移れない）
- 課題のゴールがよくわからない
- 老舗の壁

18

教員ができることは何か？

（１）授業開始前の綿密な課題設定

（２）開始後の受講生への関与度調整

（３）全期間を通じた協力者とのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ

19

（１）開始前の綿密な課題設定

•課題に行動が埋め込まれていること
何をすればいいか、具体的な行動のイメージが湧く
課題の咀嚼に時間を使いすぎてはやる気がなくなる

•授業期間内に過不足なく終わるボリューム（受講生数との関係も考慮）
時間切れによる敗北感、“人あまり”によるフリーライド

20

（２）開始後の受講生への関与度調整

どこまで関わるか（割く時間、内容）、どこまで自主性に任せるかはあくまでケースバイケースだが･･･

＜前提＞
• 受講生は必要なことを自身で学ぶ能力を持っているというビリーフ
（教員はFacilitator、Coach、Coordinator、時々Teachear）

• 「教員も答えを知らない」という教員自身の自覚と学生への周知

21

（３）全期間を通じた協力者とのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ

•課題設定時の綿密な打ち合わせ
課題内容についてのディスカッション
スケジュール感の共有　等

•役割分担
特に取り組み内容に関する厳しい指摘、期限の厳守等学外の社会人だからこそ“効く”言葉

•情報共有
授業内での学生の様子、進捗状況などを共有した上でスケジュールの調整など

22

４．課題解決型授業における学外者との交流に関する検討

23

学外者との交流

•本事例における学外者
・課題提供者
・地域住民（先住者、ニューカマー）
・地域コーディネーター
（地域おこし協力隊）

24

問題意識

- 課題解決型授業（PBL）の受講は、即、能力の向上をもたらすのか？

※「能力」（汎用的能力）
コミュニケーション力、実行力、計画力・・・

特に、「学外者（社会の大人）」との交流を経験することで、彼らのコミュニケーションしようとする意欲は単純に上がるのだろうか？

25

学外者との交流に関わる問い

＜Q1＞　課題解決型授業において、学外者との交流の回数や時間が多くなれば、学外者との交流に対する心理的ハードルは低くなるのか？

→心理的なハードルと回数や時間の相関関係を検討

＜Q2＞　過去に学外者との交流経験があれば、課題解決型授業においても学外者との交流の回数や時間は多くなるのか？

→過去の経験の有無によって学外者との交流の回数や時間に差が生じるかについて検討

26

データの収集（インタビュー調査）

対象：受講生20名
実施時期：2017年10月
対象期間：2017/5/4～10/1までの活動
形式：1対1面接、半構造化
時間：1人につき約1時間

1．学外者との交流について各自の回数と時間（分数）を聞き取り
2．学外者と交流する上での心理的ハードルの高さが4月と10月でどう変化したかを聞き取り
3．大学入学以前も含め、過去に学外者と関わって活動した経験の有無を聞き取り

27

検証方法（心理的ハードルと活動量の関係）

- 授業開始時の心理的ハードルの高さと、授業終了時の心理的ハードルの高さを、それぞれ5件法で確認
- 後者から前者を引いた数をデータとして用いる
- この心理的なハードルと交流した回数や時間の間の相関関係について、ピアソンの積率相関係数を算出

28

検証方法（過去の交流経験と授業での活動量の関係）

- 大学入学以前も含めた学外者との交流経験の有無を確認
- 過去の経験の有無によって、この授業での活動の量（交流回数や時間）の平均値に差があるかどうかを*t*検定で確認

29

結果

＜A1＞　**回数、時間いずれにおいても5%水準で有意**
→課題解決型授業において、学外者との交流の回数や時間が多くなれば、学外者との交流に対する心理的ハードルはかえって高くなる

＜A2＞　**回数、時間いずれにおいても有意差は見いだされなかった**
→過去の学外者との交流経験が有るからといって、課題解決型授業において積極的な学外者との交流につながるとは言えない

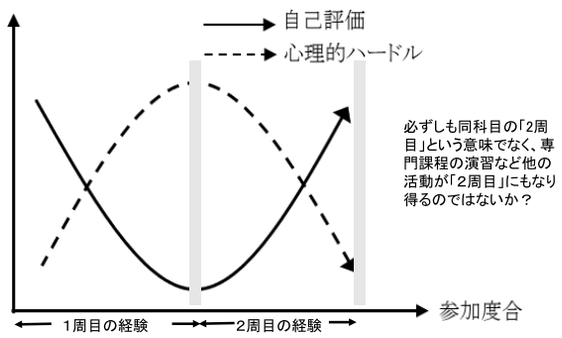
30

考察

- 課題解決型授業の受講によって即、能力の自己評価が上がるわけではない
- むしろ授業は、自身の未熟さに気づく機会を提供していると考えられる
- 真面目に取り生んだ学生ほど（一旦）能力の自己評価が下がる可能性がある
- 再び自己評価が上がるためには、「2周目」の経験が必要となる可能性がある（カリキュラムとして）
- ただし、「2周目」に入る前に「1周目」で得たものを認識、言語化できるような振り返りの機会が必要では？

31

「２周目」の体験



必ずしも同科目の「2周目」という意味でなく、専門課程の演習など他の活動が「２周目」にもなり得るのではないか？

32

ありがとうございました

京都産業大学
現代社会学部
木原麻子
akihara@cc.kyoto-su.ac.jp

33

第６分科会

立命館大学政策科学部におけるPBL:タイ・プロジェクト

立命館大学　政策科学部　准教授　豊田　祐輔

公益財団法人 大学コンソーシアム京都 The Consortium of Universities in Kyoto

第23回FDフォーラム
2018年3月3-4日 @京都産業大学

「体験・実践型学習におけるフィールドを
通じた効果と運営上の課題 」

**立命館大学政策科学部におけるPBL:
タイ・プロジェクト**

立命館大学政策科学部
豊田祐輔

1. 政策実践研究プロジェクト

タイ・プロジェクトとは

RITSUMEIKAN

立命館大学政策科学部

- 「政策（Policy）」の名前をもった学部や学科は、現在、全国で80を超えるといわれます。その中で、立命館大学の政策科学部は、慶應義塾大学総合政策学部（1990年）、中央大学総合政策学部（1993年）に続く、3番目の学部として、1994年に開設されました。

- 人材育成目的

問題解決指向的な精神を備え、政策実践力と政策構想力を持った人材を育成することを目的とします。

（学部Webページ：http://www.ritsumei.ac.jp/ps/より）

3

RITSUMEIKAN

立命館大学政策科学部
政策実践研究プロジェクトとは？

（学部Webページ：
http://www.ritsumei.ac.jp/ps/より）

4

RITSUMEIKAN

立命館大学政策科学部
政策実践研究プロジェクトとは？

- 教員による複数プロジェクト担当

春期学期
自主プロジェクト
自主プロジェクト
特定プロジェクト

一人の教員が複数プロジェクトを担当
特定プロジェクト：
学部で企画し募集するプロジェクト
自主プロジェクト：
学生が希望する研究計画を提出し、近い研究テーマの学生でグループを形成するプロジェクト

夏期休暇
（海外）
特定プロジェクト

プロジェクトで学生を海外に引率する場合は教員二名体制

秋期学期
自主プロジェクト
自主プロジェクト
特定プロジェクト

5

RITSUMEIKAN

立命館大学政策科学部
政策実践研究プロジェクトとは？

- タイプロジェクトの場合（特定プロジェクト）

春期学期
（文献調査・研究計画）
タイプロジェクト

夏期休暇
（タイでの調査・分析）
タイプロジェクト

秋期学期
（まとめ、学年コンペ）
タイプロジェクト

（12月）
（タイからの参加者、タイムサポート）
タイプロジェクト

6

タイ・プロジェクトの進め方

RITSUMEIKAN

- 最初ならびに最後を除いて2限連続各週開講
（毎週・隔週開講は教員の裁量）

進め方の例
１週目　1限目：発表＋コメント
　　2限目：コメントに基づく議論＋次回までの個人課題の確定
２週目　1限目・2限目：各自持ち寄った課題を持ち寄り議論
　　（日本人学生にとっては、授業内では留学生との議論という擬似留学環境）

教員、TA（Teaching Assistant）/ ES（Education Supporter）の役割
適宜、助言をするのみで主体は学生に

7

立命館大学・タマサート大学国際共同ワークショップ参加者数の推移

回数	日程	参加者数（立命館大学生）
1	August-September, 2003	21
2	August-September, 2004	27
3	August-September, 2005	25
4	August-September, 2006	16
5	August-September, 2007	17
6	August-September, 2008	15
-	September, 2009	15
-	August-September, 2010	12
7	September, 2011	14
8	September, 2012	15
9	September, 2013	15
10	September, 2014	6 (2)
11	August-September, 2015	6 (2)
12	August-September, 2016	12 (8)
13	August-September, 2017	13 (8)
14	2018	22 (14)

日本からタイへ

テーマ
- タイにおける都市と住宅環境開発へ向けた政策形成

合計参加者数
- 251人（立命館大学 学部生）
- 2014年度より留学生も参加

（表内のカッコは留学生数の内訳）

8

立命館大学・タマサート大学国際共同ワークショップ参加者数の推移

回数	日程	参加者数（TU学生）
1	March, 2004 @KIC	21
2	March, 2005 @KIC	23
3	March, 2006 @KIC	25
4	March, 2007 @KIC	27
5	March, 2008 @KIC	26
6	March, 2009 @KIC	26
7	March, 2010 @KIC	24
8	March, 2011 @KIC	32
9	March, 2012 @KIC	30
10	March, 2013 @KIC	40
11	March, 2014 @KIC	31
12	December, 2014 @KIC	37
13	December, 2015 @OIC	38
14	December, 2016 @OIC	35
15	December, 2017 @OIC	41 (4)

タイから日本へ

テーマ
- 大阪と京都における都市開発と歴史的地区保全へ向けた政策形成、等
Policy Formation for Urban Development and Conservation of Historic and Cultural Areas in Osaka and Kyoto, etc.

学生の選抜
- 2014年度より面接で参加者を選抜
- 2017年度よりマヒドン大学からも受け入れ開始

合計参加者数
- 452人（タマサート大学 学部生）
- 4人（マヒドン大学 学部生:2017年度より）

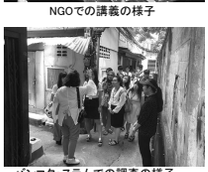
（表内のカッコはマヒドン大学生の内訳）

9

タイでのワークショップ（2017年）様子

NGOでの講義の様子

国家住宅公社での講義の様子


バンコク・スラムでの調査の様子

最終発表の様子

10

タイでのワークショップ（2017年）スケジュール

- オープニング・セレモニーなどの式典
- 大学教員による講義
- 学生による中間・最終発表
- 行政機関などでの講義・コミュニティの視察
- 現地調査

Date	Day	early morning	A.M.	Lunch	P.M.	Evening
20-08	Sunday	KIX	TG 623 (11:45 hrs.)	-	Arrived at Suwannabhumi Int' Airport (15:35 hrs.)	
21-08	Monday	8:30 hrs. Assembling	Opening Ceremony & Course Introduction (6APTU614) / Lecture 1 Social Mobility Through Housing Development Assoc. Prof. Dr. Chaiwarun Deepaiboon (6APTU614)	AP. TU	Lecture 2 Environmental Education in Thailand Assoc. Prof. Dr. Chin Siriwattanaton (6APTU614) / Group Presentation (6APTU614)	Welcome Party RACHAYADEE Restaurant @TU
22-08	Tuesday	07.30 hrs. Assembling	Visiting Community Organization Development Institute (CODI) Slum Schools	Klong Chan	Visiting Duang Prateep Foundation (DPF) Social Mobility and Poverty Study Tour Klong Toey	Siam Paragon Department Store
23-08	Wednesday	07.30 hrs. Assembling	Visiting The National Housing Authority (NHA) NHA Policy of Housing Development and Social Mobility Issue	NHA	Visiting The National Economic and social Development Board (NESDB) Social Mobility and Poverty Policy and its Solution	Sightseeing China Town Dinner in China Town
24-08	Thursday	8:30 hrs. Assembling	Visiting : Klong Lat Pran Community or others		Visiting at Klong Lam Noon Project	Fashion Island Dept.
25-08	Friday	8:30 hrs. Assembling	Visiting Mahidol University			
26-08	Saturday	8:30 hrs. Assembling	Case Study : Bangkok Cultural Heritage Chareonkrung and Bangrak Creative District			Asiatique
27-08	Sunday	8:30 hrs. Assembling	Case Study : Ayutthaya World Heritage Site			JJ Green
28-08	Monday	Whole day	Field survey @ case study I by Interview (Slum with NGO support) Field survey @ case study II by Interview (Slum without NGO support)			
29-08	Tuesday	Whole day	Field survey @ case study I by Interview (Slum with NGO support) Field survey @ case study II by Interview (Slum without NGO support)			
30-08	Wednesday	8:30 hrs. Assembling	Working & Preparation of Presentation			
31-08	Thursday	8:30 hrs. Assembling	Working & Preparation of Presentation			
01-09	Friday	8:30 hrs. Assembling	Final Presentation and Closing ceremony with Certification Awarding (6APTU614)			
02-09	Saturday	8:30 hrs. Assembling	TG 672 (11:00 hrs.)	Leave for Osaka	Arrived at Osaka (18:30 hrs.)	

11

2. 効果・課題について

①プロジェクトの課題（教員の立場より）
②学生の社会人基礎力の向上（アンケート）
③学生による授業への評価（聞き取り：日本人学生のみ）
④教育環境に関わる点（教員の立場より）

①タイプロジェクトの主な課題（教員の立場から）

RITSUMEIKAN

言語（英語能力）

2013年度まで（日本語で実施）：現地での調査時の英語力の格差
　→現地に行ってもなかなか理解できない、話せない
2014年度以降（留学生と英語で実施）：日本人学生と留学生の英語力の格差
　擬似留学環境であるが・・・
　→留学生中心の議論となる
　→日本人学生の巻き込みの課題
　（教員や日本語ができる留学生のサポート方法が課題）

*申請にあたって日本人学生へ英語要件は課していないが、（その後の頑張りに期待して）目安としてTOEFL-PBT460点（なお、留学生の学部出願要件はTOEFL-PBT 530点）

13

①タイプロジェクトの主な課題

RITSUMEIKAN

運営①（セメスター）

・テーマ決め（バラバラなテーマから始まる）
・グループワークへの教員による関与方策

運営②（ワークショップ）

現地調査の運営（相手校とのギブ＆テイク）
・研究計画をタイの大学へ、相手校で調整（夏期休暇）
　*現地では柔軟に対応（研究テーマ、内容、調査など）
・現地教員と相談、こちらでテーマを提案（12月）

14

①タイプロジェクトの主な課題（教員の立場から）

RITSUMEIKAN

評価方法

＜シラバス＞
受講生の到達目標
問題を的確に発見し、合理的な解決方法を見出す能力を身に付ける。

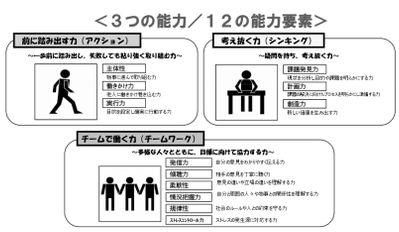
成績評価方法
学期末に課されるプロジェクト報告書は単位取得要件とする。それに加えて、研究遂行過程としての授業出席、個人学習、グループワークやフィールドワークをみることにより、総合的に判断する。
（報告書には、誰がどこを担当させたのか明記させ、個別に評価する）

15

②学生の何を評価するか

RITSUMEIKAN

汎用力に注目した「社会人基礎力」の構成要素



16

出典：経済産業省,『社会人基礎力』, (n.d.), アクセス日: 2017年2月26日:　http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/

②学生の何を評価するか

RITSUMEIKAN

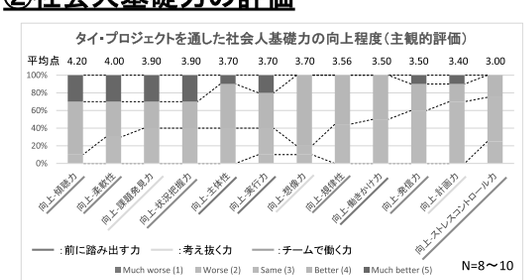
汎用力に注目した「社会人基礎力」の構成要素

「基礎学力」（読み、書き、算数、基本ITスキルなど）や「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための能力の重要性を指摘するものであり、働く分野に関係なく共通するものとして提示されている。国際化する社会においては、職場などにおいて多様な文化を有する同僚などと協働することが求められることが多くなっていることからも、多くの職種において重要なスキルであると考えられる。

17

②社会人基礎力の評価

RITSUMEIKAN



18

②社会人基礎力の評価

RITSUMEIKAN

＜特記事項＞

- 傾聴力・柔軟性：グループディスカッションによる傾聴と発言、様々な意見がある、意見交換する機会が多かった等
- 課題発見力：現地での調査による問題発見と分析等
- 状況把握力：グループワーク時の役割について、調査時の雰囲気などが異なることによる注意等
- 主体性・実行力：自分たちで文献調査を行い発表を行う必要性、グループワークでは主体性が必要であった等
- 創造力・規律性：タイで異なる価値を学んだ、日本人・タイ人との協働作業では異なる価値があった、異なる意見を理解すること等
- 働きかけ力：日本人学生をもっと巻き込ませるための努力、特に働きかけることはなかった等
- 発信力：自分の意見を理解しやすい形で伝える必要性、特に変化がなかった等
- 計画力：調査内容などを決める必要性、すでによく教育内容やワークショップがプログラムされていた等
- ストレス：現地での変更など→対応できたと答えた学生とそうでない学生がいる等

19

②主観的評価の課題（参考）

RITSUMEIKAN

- 左表はワークショップ（12月参加のタイ人学生対象）の事前と事後評価の比較
- 右表はワークショップ終了後にどの程度成長したと思うかの回答

→すべて向上しているが、その相対的向上順位は大きく異なる

1. Not at all
2. Not much
3. So so
4. Much
5. Very much

N=35-40

時点自己評価（事後－事前）	社会人基礎力 指標
0.63	主体性
0.60	創造力
0.57	発信力
0.56	課題発見力
0.54	実行力
0.53	計画力
0.53	ストレスコントロール力
0.50	傾聴力
0.45	働きかけ力
0.35	情況把握力
0.28	柔軟性
0.25	規律性

社会人基礎力 指標	振り返り自己評価（回答平均）
傾聴力	4.43
柔軟性	4.36
規律性	4.34
情況把握力	4.29
ストレスコントロール力	4.29
課題発見力	4.28
創造力	4.28
働きかけ力	4.26
発信力	4.25
計画力	4.21
主体性	4.14
実行力	4.13

1. Much worse
2. Worse
3. Same
4. Better
5. Much better

N=39-40

20

出典：豊田祐輔「「社会人基礎力」の時点自己評価と振り返り自己評価の相違―タイ人大学生を対象とした短期間国際PBL研修を事例として―」『地域情報：立命館大学地域情報研究所紀要』Vo.7. 2018（印刷中）

③タイプロジェクトの進み方（日本人学生へのインタビューより）

RITSUMEIKAN

前期

日本人　日本人

話したいこともあるが、
英語の壁もあり話しかけられない
（日本語のサポートなし、
英語の議論についていけず議論が終わる）

議論に入るように話しかけるが、
なかなか話してくれない

留学生　留学生

→

日本人　日本人

共通の趣味があり仲良くなる
↓
分からない時に尋ねやすくなる

留学生　留学生

21

③タイプロジェクトの進み方（日本人学生へのインタビューより）

RITSUMEIKAN

夏期休暇（タイ・ワークショップ）

日本人　日本人

タイに滞在中にタイプロジェクトの作業の必要性から話すように
このままではダメだと思うようになる
↓
仲良くなり、他の話題については話すようになる

留学生　留学生

22

③タイ・プロジェクトの実態（日本人学生へのインタビューより）

RITSUMEIKAN

- **日本で事前学習していたことが最新ではない**

文献調査より課題を提起したが、既に取り組まれていることがある
→研究発表の時間的遅延と現在進行形で進む現状の課題と対応策

- **調査分析技法（統計学など）の基礎力はあるが応用力はない**

あるデータの分析はできるが、データを集める場面から進めるのは難しい
→2回生配当であるため、ここで社会調査や統計学応用の経験を積む

- **スラム訪問による発見**

不幸せだと思っていたが住民は幸せに生きている（現地で話を聞くことの重要性）
→日本にいては出会わない現状や考え方との接触

23

③タイ・プロジェクトの実態（日本人学生へのインタビューより）

RITSUMEIKAN

- **2限連続の是非**

1限目が終われば、だれてしまうことが多い
→発表日のみ1限目を発表、2限目を議論時間として、それ以外は毎週1限で終了

- **連絡事項の英語**

重要な連絡が英語のため、全て正確に理解できていない点があった
→重要連絡は曖昧な点を回避することも含めて日本語でも伝達する必要性

- **日本人学生と留学生の授業外打ち合わせが困難**

打ち合わせが急きょ決まることが多く、日本人学生はアルバイトなどがあり参加できないことが多い
→教員の方でセメスターの最初に学生に事情を説明し、授業内に議論が終わらない場合は2限目も継続することにし、その時間になるべく予定を入れないように指導

24

第6分科会

④タイプロジェクトの主な課題
（教員の立場から教育環境に関わる点）

RITSUMEIKAN

リスク管理

- 病気（現地の病院）
  〔留学生も教員も海外旅行保険に加入〕
  →教員の引率（男性）と現地教員の協力（女性）
  1名が病院へ付き添い、1名はプログラムを継続

- 政情不安（爆発事件やクーデターなど）
  →出発直前の出来事（訪問の是非は担当教員で判断した）

- 誓約書
  学生だけでなく保証人にも誓約書を送付（留学生の場合、海外にも発送）

25

まとめ

RITSUMEIKAN

効果

- **社会人基礎力**：向上している面が多い
- **英語能力**：特にスピーキング・リスニング力が向上
- **現地訪問**：固定観念の打破（スラムでの生活など）

課題

- **語学の課題**：学生間、連絡、現地ワークショップでの講義・調査
- **情報のアップデートの課題**：参考文献の情報と現状の乖離
- **調査分析技法の課題**：応用力の涵養
- **授業運営と日本人学生・留学生の生活実態の課題**：教員で設定と説明

26

教育コンテンツとしての実践的デザインプログラム

京都精華大学　デザイン学部建築学科　教授　葉山　勉

教育コンテンツとしての実践的デザインプログラム

京都精華大学　デザイン学部　建築学科　　葉山　勉

デザインとは？

行おうとする事や作ろうとする物について、構想すること。
＝　**「プロジェクト」**

・快適性　（使いやすさ、居心地、好み、楽しさ、質的豊かさ、美・）
・機能性　（効率の改善・改良、安全性、経済性、用・・・）
・社会性　（環境問題、地域問題、意味、文化、メッセージ・・・）

→　デザイン力＝異なる要求条件を調整し開発する力
↑
学士力の育成に有効か？

参考：〔学士力に関する主な内容〕
「学士課程教育の構築に向けて」 中教審

1. 知識・理解（文化，社会，自然　等）
2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル，数量的スキル，問題解決能力等）
3. 態度・志向性（自己管理力，チームワーク，倫理観，社会的責任等）
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

楽器　＋　家具　＋　遊び場

1.遊具　×　幼稚園

幼稚園要望＝安全性

楽しさ
なめても大丈夫
角なし
柔らかさ
頑丈さ　倒れない

空間の出前

2.水車　×　上賀茂神社

神社要望＝話題性　ー　雷の社・小川

発電・京都性・境内景観

3．空気乾燥機
×
企業

企業要望＝デザイン

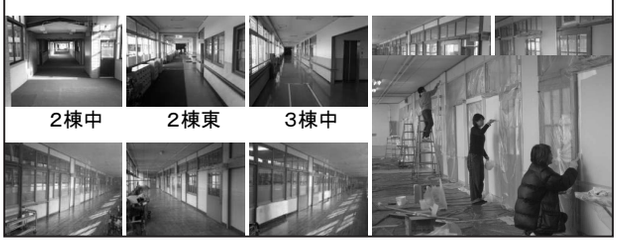
機械部のカバー
コンパクト化
デザイン性
生産コスト

4. インテリアコーディネート　×　総合支援学校

学校要望＝わかりやすい　ユニバーサルデザイン

1．カラーコーディネート　－　床、壁、ドア
2．サイン計画　－　オリジナルかつ汎用性を持つこと

渡廊下　本館1階　本館2階　1棟中　1棟東



2棟中　2棟東　3棟中

5. 団地リノベーション　×　住宅供給公社

6. 店舗デザイン　×　企業

7. 廃校活用　×　丹後町

地元要望＝活性化

住民が使う
ゲストが利用する
交流人口の増加

8. 伝統建築現場監理　×　企業

9. 建築設計　×　漁業協同組合

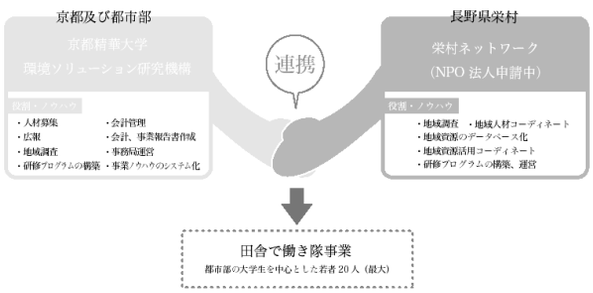
組合要望

デザイン性
機能性　－　事務所+休憩所+販売所
観光客・交流人口の増加

１０．子ども遊び　×　地元町内会

１１．過疎村地域振興　×　長野県栄村

「田舎で働き隊！」事業に参加し、グリーンツーリズムをめぐって
都市部の人材を山村の活性化のために仲介する業務を実施する。
７泊８日



１２．京都中央卸売り市場活性化プロジェクト

要望
：市民へ開かれた市場のありかた

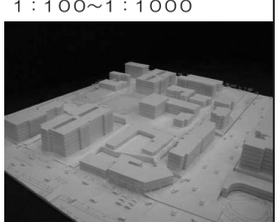
参加学生
：修士課程１年生　６０名
　必修演習科目
「プロジェクト企画演習」

１３．まちづくり　×　京都市

要望

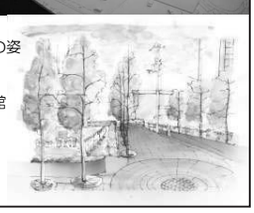
生活しやすい町　＝安全性　都市機能　住民交流
賑わいの回復
イメージアップ

住民ワークショップ　　数十回？
１：１００～１：１０００

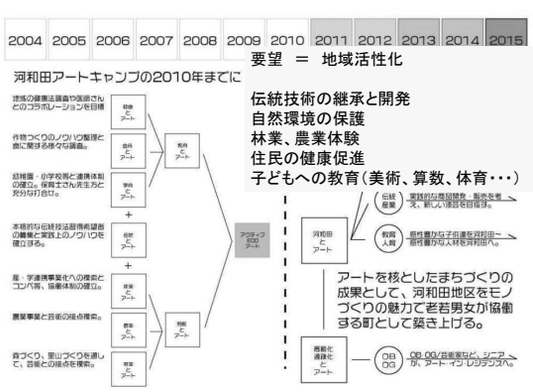


２０年後の町の姿

住棟建て替え
保育園・児童館
交流施設
民間施設
病院
公園整備



１４．アートキャンプ　×　福井県鯖江市



Ⅱ. PBLプロジェクトのプロセス事例

● 精華町要望

1. 一坪の大きさ
2. 先端技術の町　精華町
3. イチゴとスイーツの町　精華町
4. 屋根付き　雨天使用
5. 常設展示で使用
6. イベント時に移動して使用
　＝組立式・軽さ・コンパクト化
7. 予算内

● スケジュール

4月：　町歩き　設置場所確認
5月：16案のプレゼンテーション
6月：　8案のプレゼンテーション
7月：　2案のプレゼンテーション
8月：　案の決定
9月：　制作（地元企業にて）
10月：　宇治市イベントにて展示

茶室
×
精華町

お茶の京都博
2017

● 参加学生：

建築学科3、4年生　：16名

選択必修実技科目

最終案プレゼンテーション　「 華 」　精華町 + 京都精華大学

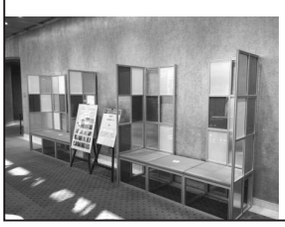
デザインコンセプト ：
現代の材料を用いて移動可能かつ、さまざまな表情と空間をつくる日本の伝統文化と現代性を融合させた、「華」のある一坪茶室。

入れ替えパネル式屏風壁　×　4枚
床　×　9台
ポリカ板屋根　×　2枚

完成後
けいはんな記念公園内に
常設展示

町内外でのイベント時には
移動式茶室として活用

本日は宇治市内の商店街で



団地リノベーション × 京都市住宅供給公社

― 二軒茶屋団地ケーススタディ ―

- 団地の高齢化と空き家化
- 建築ストックの有効活用
- 若者・子育世帯の居住による
  「ミクストコミュニティ」の実現
- 建築学科学生とのコラボレーション
- 大学と地域社会の連携

第6分科会

● プロジェクト概要

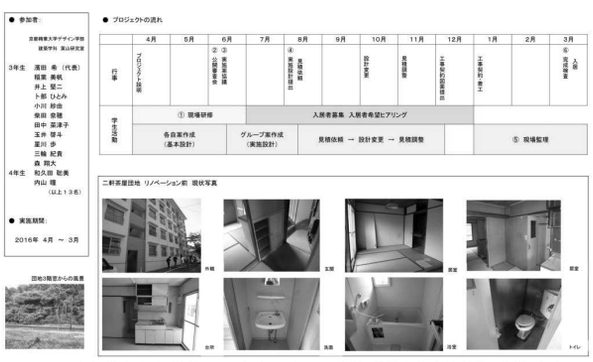
京都市住宅供給公社が所有・管理する二軒茶屋団地において，団地の高齢化と空き家化が進む中，今後もストックを有効活用し，学生を含む若年世帯や子育て世帯の居住による 「ミクストコミュニティ」を実現するため、京都精華大学建築学科学生とのコラボレートによる「団地リノベーションプロジェクト」を実施する。

学生にとって、実践的な建築設計の経験を積むこと、住民・建物共に高齢化が進む地元の社会問題を解決することが期待される。

団地概要：

昭和44年建設
RC5階建て階段室型1棟，
20戸（内空き家7戸），3DK，
住戸専有面積45．84㎡

京都市二軒茶屋団地リノベーション プロジェクト



参加学生：建築学科 3，4年生13名　　前期：選択必修実技科目、後期：有志

● リノベーション条件

1．使えるものは残しながら新たな価値を付け加えた、自由度の高いすまい

2．学生・若者・子育て世帯が入居することを前提とした空間構成

3．工事費 約25〇万円／戸 （家賃 5万円を想定）

● スケジュール

1住戸のリノベーションを先行実施
4月～6月 工事 （学生現場研修）

4住戸のリノベーションを実施
4月～ 6月 リノベーション設計案の作成
7月～12月 実施設計、工事費見積、設計変更、入居者募集
1月～ 3月 業者決定、工事着工
4月～ 入居

現場研修

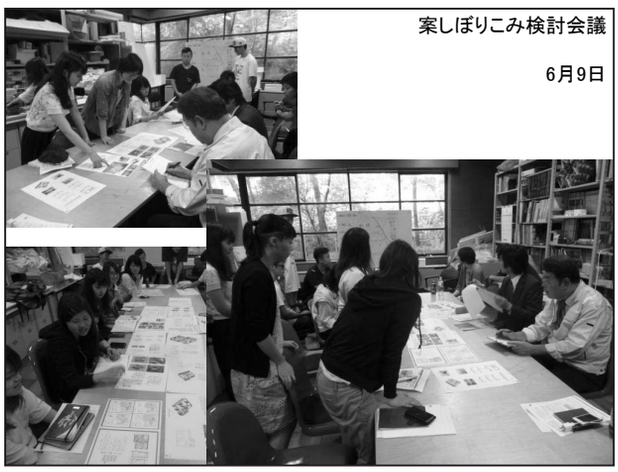
4月21日（解体工事）

5月12日（下地工事）

公開審査会
6月2日

市内地下街を会場とし、作品の展覧会および学生からの発表を踏まえた公開審査会を実施した。関係各位からの評価に加えて、一般通行者からの意見も集め参考とした。

案しぼりこみ検討会議
6月9日



現場監理
1月17日、26日
2月9日、16日、23日

完成内覧会
3月　23日

302号室　収納を楽しむ

2方向から収納＋ディスプレィ

間仕切り家具

まとめ　体験・実践型の授業実施における課題

1. 厳正な成績評価
   ・グループへの評価と個人への評価
   ・作業の量評価と成果品の質評価

   学生による・自己評価と他者評価
   評価ルーブリックの提示、学習研究
   プロセスの記録、外部評価の導入

2. 参加学生の意欲維持と学生満足度
   ・必修と選択
   ・正規授業科目と自主活動

   責任に伴う精神的、肉体的な苦痛
   ハラスメントとの境界（内容・費用）
   社会実装型授業 ⇔ アルバイト

3. 知的財産権と業務報酬
   ・知財としての個人と組織でのアイデア
   ・報酬の分配方法

   外部組織との契約内容
   企業・学生の守秘義務
   経費＝交通費＋材料費＋人件費

4. 学内外との実施協力体制の構築と継続性
   ・プログラムの準備・運営・発表・事業化・検証
   ・学生・連携先担当者の交代

   教員＋職員＋外部協力者の協働
   担当事務局の存在
   記録の重要性

5. 外部評価体制の構築と業界との関係
   ・連携先評価と客観的評価
   ・業界専門家への業務発注

   評価軸のぶれの問題
   プロの仕事を取る結果
   大学間・企業・自治体協働の可能性